通り雨。

nenechan。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
通り雨。

【Ｎコード】
Ｎ３２４５Ｔ

【作者名】
ｎｅｎｅｃｈａｎ。

【あらすじ】
問題はいっぱいあるけれど、
それでも好きだから繋がっていたい。
そう思うのはいけませんか？

小さな世界からの始まり。（前書き）

確かな記憶じゃないけれど、
あの日は晴れていた気がする。
春を迎えたばかりの季節。
風はまだ少し冷たかったかな。

小さな世界からの始まり。

一・・・

私の名前は瑠依(るい)。

今年から華のＪＫデビューを果たす。

そして今は卒業式も終わって、春休みの後半を満喫中。

高校から送り付けられてきた課題も終わらせて、余裕かましてＰＣの毎日。

今日も親が家からいなくなってすぐにＰＣ。

結構前からオンラインゲームをしてる。

凄くハマってて毎日やってる。

決まって欠かさずチェックするのは、メールボックス（ゲーム内の）と、プロフィール。

プロフィールは、伝言か何かがあったら返さなくちゃいけないし。

私以外誰もいない家に、マウスの音が響き渡る。

「・・伝言きてる。」

一人だと異常に独り言激しくなる。

傍からみたら怖いね。

今日も伝言板にコメントがあった。

３通きてて、最初の２通はお友達から。

どうでもいい世間話の続きだ。

「てかこれ昨日落ちた後じゃんー」

とか、また独り言。

３通目に目をやると、話したことない人。

でも見たことある。

・・あ、「見たことある」っていうのは、このオンラインゲームは自分そっくりのアバで遊ぶゲーム。

まあ、そっくりじゃなくてもいいんだけど。

その人のＩＤは”ｒａｉ．”。
ｒａｉのコメは何かチャラそうな感じ。
んー。
楽観的な感じにも見える。
そう思いながらも、コメを返す為にｒａｉのＰＦにいった。

「へぇ～・・。３５歳なんだ。」
自己紹介を見ると誕生日やら年齢やら書いてあった。
ちょっと驚いたのが、好きな音楽の欄に”湘南”て書いてたこと。
湘南て、３０代の人も聴くんだ？
若い人向けの歌だと思ってたけど、そうでもないんだ。
ブログも見させてもらった。
つい爆笑しちゃうくらい、ｒａｉのブログは面白かった。
読んでて一人で笑ってたな。
ネタ調で一日の出来事をつづってたりとか、このオンラインゲーム内でできた彼女へのラブメッセージみたいなのとか、色々と書いてあった。
まぁ、もう別れてるっぽいけど。

本文の中で知ったことがいくつかあった。
スカジャンと髑髏好きなのともう一つ、奥さんがいること。
まぁ、この歳で奥さんいないのもおかしいか。
「さ、そろそろコメ返すか。」
いやー・・この人、ブログは面白いけど書きすぎじゃないか？（笑）
とか思う。
全部見たいけど量が多すぎて見きれない。
そして、ＰＦの最初の画面に戻してコメのお返しをした。

この何気ない私の返事が恋の始まりだなんて、知るはずがなかった。

小さな世界からの始まり。（後書き）

フィクションでもり、ノンフィクションでもあり。

妻帯者。

その日から、ｒａｉとよく伝言板で会話するようになる。
ｒａｉは日中仕事だから、１８時くらいから伝言板を使って話しをするという毎日になった。
日中はやっぱり暇で、（勉強しろって話しだけど）だから適当にゲームして暇を潰してた。
ｒａｉが帰ってくる時間を待つのはとっても長く感じてた。
ただその分、『ただいま』のコメントを見ると、おっきな安心感に包まれてる自分がいた。
話してて素直に楽しいと思える、そんなｒａｉだった。
・・私が子供だからだろうか。
返ってくる言葉はやっぱり楽観的だけど、一つひとつがどこか大人びていて「やっぱ大人だなぁ」と思ってた。
バカだから難しい言葉とか使われると「ん？」ってなる時も多々あったけど、気にならないくらい楽しかったからそれで良かった。
だからちょっとしたお勉強にもなってたんだ、って今では思えてる。
一番は”ｗｉｆｅ”という単語。
ｒａｉのブログにこの言葉が使われていて、「どういう意味だろう」って疑問だった。
調べたら”妻”って意味だと初めて知った。
それが、ｒａｉは妻帯者だってことを知った瞬間でもあった。

ふとしたきっかけで始まっていたｒａｉとのメール。
最初はまだオンラインゲーム内でのメールのやり取りだったけど、いつだったろう。

リアルでメールをし始めたのは。
『直メしよう』って言われた時は正直戸惑った。
だってｒａｉには・・・

でもね、
好きって気持ちは、時に考えてることとは裏腹なことをしてしまうもの。

だから私はあの時、君に「いいよ」って返事をしてしまったんだ。

favorite song

その日から毎日メールし合ってた。
聞くに、ｒａｉの本名は”樹(いつき)”っていうらしい。

初めて電話した日。
それは初めて声を聴いた日。
『もしもーし』
電話口から聴こえる声。
「・・もしもーし。」
そう返した。
『うわ（笑）わっかいなー（笑）』
すぐに言われた言葉がこれ。
「いやいや、若いんです！」
軽くツッコんでみた。
『いやね、声高いっつか、若いわ（笑）』
ってな感じのが最初の会話。
「樹も大人っぽい声してるよ」
って言ったら笑われた。
『立派な３５の大人ですから♪』
言い方も余裕な感じ。
これぞ大人の魅力というものか。↑

・・ん～。
気になる。
聞いてみよう。

「ところで、何聴いてんの？」
電話口から聴こえるのは樹の声だけではなかった。
結構騒がしいから、何か音楽かけてるのかな？って。
『あー（笑）俺のマイペ（オンラインゲームのプロフィール）見た？』
質問したのに何故か質問し返された。
「見たよー。ブログは全制覇してないけど、自己紹介とかは全部見た！」
『早ぇな（笑）　んじゃ、俺が湘南好きなこともお分かり？』
ほほう。
ということは今聴いてるのは湘南か？
「お分かりお分かりー。じゃ、湘南が聴こえてるってことかっ」
『そーゆこと』
なるほどね。
でも失礼ながら、湘南は好きじゃない。
『ありえなー（笑）』って言われたけど、あり得るんだなこれが。
突然に樹が言った。
『今からメールで歌送るからすぐにｉＰｏｄ入れといてねー』
それからすぐにメールが届いた。
ちゃんと添付されてる。
「え、何の歌？湘南？」
って言いながらファイルを開く。
『湘南嫌いな人に湘南送る奴はいないだろ（笑）　まー、聴いてみーよ』
諭されて聴いてみる。
思わず吹いた。
「とんねるずかよ！（笑）」
まさかのとんねるずで笑いがやばい。
『とんねなめんなよ？（笑）　木梨めっちゃ歌上手いから。その”恋人”って歌もめっちゃいいから。覚えといて？』

うん、木梨氏がお上手なのは知ってた。
この”恋人”って歌は初耳だけど。
樹と電話しながら聴いてたときは、「何か樹らしいな」って思って笑っちゃってまともに聴いてなかった。
それから私のオススメの歌を聞かれた。
「いきものがかりの”風と未来”ってやついいよ」
『そんなんあるんだ？』
ＣＭで使われてる歌だから知ってると思ったんだけどな～。
『じゃあ送ってよ♪』
って言われたから送った。
その時聞いた。
「なんで聞いたの？何となく？」
だって、今まで樹のような人はいなかったから。
”歌送って”って言ってくる人も珍しいなーって。

――・・

電話し終えてすぐにｉＰｏｄに入れた。
そして再び聴く。
（遠距離恋愛の歌・・？）
歌詞をよく聴いてると、どうやら遠距離恋愛の歌みたい。
木梨の声とマッチしてていい。
なんか気に入っちゃった。

～♪

携帯が鳴った。
樹からのメールだった。

――――――――――――――――――――――――――――

ーーーーーーーーー

その歌、完璧にマスターして俺に聴かせてね♪

期限は明後日までってことで（゜∀゜）

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーー

速攻で返した。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーー

無理って言ったらどうする？

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーー

・・でもさっきの樹の言葉、あんなこと言っていいのかな。

”さっきの言葉”

それは、どうして好きな歌を知りたがるのかを聞いたあの時。

『好きな人のお気に入りを知っときたいのは当然じゃない？』

・・まともに受けていいのかな。

いや、違う。

むしろ、まともに受けちゃダメなんだ。

ちょっとでもドキっとしてしまった自分を拒否する自分がいた。

時間。

今日は本来、高校の入学式があるはずだった。
でも震災があって延期。
あと2週間は休みがある状況。
今の私はそれが喜びになってた。
学校が始まるということは、今までのように樹と話せなくなる。
声が聞ける時間が減ってしまう。
だから嬉しかった。

今日もいつものようにお昼までダラダラ過ごしていた。
「そろそろかな」なんて時計に目をやると、時刻は1時くらい。
1時か2時から1時間休憩があるみたいで、その休憩時間を私との電話に費やしてくれている。
でもおかしいな。
1時を過ぎたのにメールがこない。
『電話していい？』ってメールがくる時間なのに今日はこない。
（お仕事忙しいのかな？）と思い、待つことにした。
「待ってる間なにしようかなー」
そんなことを言いながらパソコンに向かう。
適当にサイトを眺めていると、つけていた”スカイプ”から呼び出し音が鳴った。
ノートパソコンだから内臓マイクがあって、わざわざマイク自体を買わなくても通話ができることに最近気づいたのだった。
イヤホンをパソコンにつけて、通話に応えた。

「もしもしー」
『もしー。瑠依お久ー』
通話の相手は侑(ゆう)。
侑ともオンラインゲームで友達（？）になった。
スカイプＩＤと携帯の番号、アドレスを教えていてリアルで繋がっていた存在でもある。
何ヶ月か前からか連絡を取り合わなくなって、最近あった震災で心配して電話をくれたちょっと謎な人。
メールの返事を返してくれる割合がとても少ないので、以前に一度”もう連絡絶つね。ばいばい”と、言ったことがあった。
相変わらず返事はなかったのだが、最近の震災で心配してメールと電話をくれた。
考えてることがよくわからない人だ。
別に付き合ってはいなかった。
でも好みだった。
一時期すごく好きで、しょっちゅう電話し合って笑いあったり、時にカップルのような会話もしたりしていた。
そんな侑から電話(スカイプ)がきたので少し戸惑ったが、暇なので出てみた。
侑も暇らしく、出会ったオンラインゲームで一緒に話しながら遊ぶことになった。

時刻は2時をまわっていた。
久しぶりということもあって、すごく楽しい時間を過ごしていた。
ふと携帯に目を移すと、サブ画面に映る一点の光が点滅していた。
「あ、やば」
つい声に出してしまった。
急いで携帯を開けると、メールが一通きていた。
受信ボックスを開くと案の定、樹からだった。
――――――――――――――――――――――――――――――――

ーーーーー
疲れたー（，Д｀）
やっと休憩入った・・
今から大丈夫？

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーー

時計を見た。
そのメールから40分は経っていた。
（あと20分くらいしか話せないじゃん！）
・・『瑠依？どしたん？』
侑が言った。
「ごめん、今からちょっと電話しなくちゃいけないから切るね。ほんとごめん」
そう言うと、『りょーかいっ。ばいばい』と通話を終わらせた。
メールの返事をせず、すぐに電話をかけた。
呼び出し音が数秒鳴って、少し低めの声が電話口から聞こえた。

『もしもーし。』
「あっ、もしもし・・ごめん樹」
小さなため息が聞こえた。
がっかりしたかな。
「ごめんねほんとに・・メールきてたの気付かなくて・・」
『怒ってないよ（笑）でももう時間ないよ？』
あと10分か・・。
怒ってないって言う反面、何度も聞こえるため息。
「ため息つかないでーまじごめん」
『ため息？・・タバコだよ（笑）』

あ、タバコか。
んー・・いやー、何話そう。
１０分しかないのに。
「お・・昼食べた？」
焦って聞いたのがこれ。
『食った。まっずい昼飯な』
まずい？
「まずいって何食べたの？」
話しによると、樹は介護士をしているらしく、年寄に出されるお昼と同じ物を食べさせられるらしい。
そのご飯が毎回お年寄りの歯を気遣うメニューなもんで、白米はべちょべちょ。毎度決まって煮物（味は激薄）らしい。
もちろん味噌汁も薄いとか。
その話しを聞いて爆笑したのを覚えてる。
可哀相って感情と、それを食べてる樹を想像したら面白くって笑いが吹き出た。
『まじで笑いごとじゃねーわ（笑）ほんと辛いよ。だから俺が飯炊くときは水の割合多目にしてる。でも上からうるさく言われるんだよなー・・ったくよー（笑）』
私がずっと笑っていると、樹が一言『あ、あと5分な』と言った。
時間無いこと忘れてた。
「笑ってたら時間忘れてた」
樹と話してると楽しいから時間が経つの早く感じる。
『まったくー。着信音量大にしといてー？』
「はーい。ごめんなさーい」
鼻で笑ったかと思うと、樹が言った。
『そろそろ時間かな。じゃ、ラブ注入よろしく』
「は？」
おいおいラブ注入て・・とか思って言ったけど、若干照れ隠しのつもり。

『あ、罰ゲームってことでいいかな？ほら、時間あと3分しかないよ？』
罰ゲームて・・あ、メールの返信遅かったことに対してか？
許すって言ったじゃんよー・・とか思ってたら急かす樹。
「わかったよはいはい！何言えばいーの？」
あーあ。　衝撃だったわ。　地味に恥ずかしかったわ。
『好きって言ってみ？』
少し笑ってるから軽くむかついた。
「無理！」
『話す時間１０分にした人誰だっけー　あーほら、時間やばい。』
うあー　まさに崖っぷちだったわ。
大人ってこんなに上手だったっけ。
仕方ないから言ったよ。
おかげでプライド傷ついたけど。
『やん、可愛い♪　じゃーまたね♪　終わったらメールするよ』
まさにチーンて感じで終わった。

消えない。

毎日繋がってることを確かめ合うけれど、
それでも消えないものはある。
どんなに好きって言い合っていたって、
やっぱり消えないわだかまりのようなものが、こじれて離れてはくれない。
どうしたらこの不安は消えるのだろう。
どうしたら満たされるのだろう。

たくさん考えても、辿り着く答えは一つしかない。
それは悲しくて辛くもある、”別れ”という名の終わりだった。

――・・・

いつもの朝を迎える。
相変わらずの春休み中。
カレンダーとにらめっこしても、時間は戻らなければ急に進むこともしない。
目が覚めると携帯のサブ画面が点滅してる。
重たい目をこすり、受信ボックスを開くと樹からだった。
メールを始めてからどのくらいが経つだろう。
忘れてしまうくらい長く続いていた。
だからもう、樹と繋がっていることが当たり前になっていた。

この日もお昼と夕方に声を聞き合う。
楽しいし、何より落ち着くし、ドキドキもしたけれど最近物足りないと感じてしまう。

恋は時間が経つ度に欲を強める。
会えない辛さ、触れ合えない辛さ。
そして、私だけの人にはなれないことの寂しさからは
どうしても目を背けることができなかった。

”もっと早く出会ってれば可能性は広がったかもしれないのにね”

『思うんだけどさ・・あ、今から言うことは俺の本音ね』
会話の中で言った樹の一言から始まった。

『こうやって電話して声聞いたり、電話できない時にもメールして繋がってられるけどさ。俺はそれでいいと思ってるけど、瑠依はどうなの？』

最初、意味が分からなかった。
どうしてこんなことを急に言い出したのかも全く。
でも一つだけ、
別れの始まりだってことは察してた。

「どういうこと？」
この言葉は私にとっての、ほんの細やかな現実逃避だった。
・・いや、現実逃避というよりかは繋がっていられる時間を少しでものばす為だったのかも。

『年齢とか距離が離れてるってことは問題っちゃ問題だけど、大それたもんでもなくない？一番は俺が妻帯者だってことじゃん？』
樹も同じことを考えてたんだって、改めて感じた。

『そんな奴を好きになって、辛い思いをするのは瑠依だと思うんだよね・・。俺は正直、奥さんは人間としては好きだけどそれ以外な

いんだよ。瑠依のことは女として一番に好きだけど、それで瑠依の辛さは消えないじゃん。逆にもっと辛くさせちゃうと思うんだよね』

樹は思いを次々と話していく。
どうしてだろう。
だんだん胸が軽くなっていく気がした。
それと共に、また別に胸が締め付けられた気もした。
それは多分、今までの辛さから解放される安心感と、好きな人が離れていく辛さだと思う。

「・・わかった」
思い口を開いてそう呟いた。
『ゆっくり考えて答え出したら教えて？』

答えなんて、もう出ていた。
それはきっと、好きって思った時から考えていたからかもしれない。
妻帯者、遠距離、年齢差。
今更考える必要はなかった。

『自分よりも瑠依が辛いだろうから・・』って言ってたけれど。
辛いのはお互い様だよね。
私を、そして樹をも辛さから解放するにはバイバイするしかない。
答えは固まってた。

・・
恋は時に、人の考えを１８０度変える。
答えを送ったのは、電話を切ってからそんなに時間が経ってなかった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

―――――――――――――

辛くても続けたい

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――

自分勝手だけれど、この時の私は冷静さを失っていた。
それからすぐに返事がきた。

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――

わかったよ。　ちょっと嬉しいよ♪

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――

優しい言葉が返ってきた。
この瞬間、今まで以上の辛さが私を襲った。
それは私だけじゃなく、樹も同じだったと思う。

通り雨。

樹が辛いのはわかってるよ
同じくらいに私も辛いから
でもお願い

最後のわがままを、最後のお願いを、
どうか許してください

――――・・

翌日。
今日は日曜日。
午前8時頃に目が覚めた。
携帯を開く。
珍しく誰からもメールがなかった。
（まだ起きてないのかな・・？）
朝起きて、まず一番に考えるのはいつも樹のことばかり。
まだ来ていないメールボックスを開いた。

「わかったよ。ちょっと嬉しいよ♪」

昨夜の樹とのメール。
再び見てまた考えてしまう。

本当にこれでいいのかな？

好きだからね。

どうしても繋がっていたい、って気持ちを優先させてしまうんだよ。

（・・ごめんね）

首までかけていた布団に顔を潜らせて、心の中でそう呟いた。

リビングから音がする。

親が起きたみたい。

目を擦ってベッドから起きた。

そして部屋を後にした。

――――

ご飯を食べて部屋に戻る。

そしてすぐに携帯を手にとる。

受信ボックスにメールが一通来ていた。

（樹かな？）なんて、期待を抱きつつ。

「なんだ・・」

クラスメートからだった。

でもどうしてかな。

もう１１時だよ？

いつも朝起きたら「おはよう」ってメールくれるのに。

（私からするべき？）

今まで何故か、変に意地になって私からメールを送らなかった。

でも今は意地なんて必要ない。

――――――――――――――――――――――――――――

おはよーう
起きた？
メールないから心配したよ
どうしたの？
―――――――――――――――――――――――――――
これが初めてだったかもしれない。
私から樹に送ったのは。
この返事が来たのは３０分くらい後のことだった。
――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――
おはよ。
ごめん、嫁と喧嘩してたからそーゆー気分じゃなかった。
――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――
とても素っ気ない文だった。
・・私ってどうしてこんなに捻くれているんだろう。
どうして素直になれないんだろう。
「そうなんだ、大丈夫？」って、優しい言葉で返せたら良かったのに。
この時は奥さんに嫉妬してしまった。
嫉妬なんて・・

今始まったことじゃないのに。

―――――――――――――――――――――――――――

そうなんだ。

ごめん、もうメールいいや。

―――――――――――――――――――――――――――

嫉妬心から作ってしまったメール。

今では後悔してる。

あの時まだ、心のどこかで好きだからやめたくない、って思ってたのに。

心と裏腹な言葉を発してしまう自分が大嫌い。

素直じゃない自分が大嫌い。

返事は案外早かった。

―――――――――――――――――――――――――――

そっか。

優しくなれなくてごめんな?

―――――――――――――――――――――――――――

この言葉に胸が痛んだ。

それと共に、

「あ、もう別れだな」って感じた。

―――――――――――――――――――――――――――

樹は優しいよ。
私もわがままでごめん。

――――――――――――――――――

そう送った。
それからずっと返事を待ってた。
何時間待ったかな。
返事なんてもう来なくてもおかしくなかったのにね。
うん、
やっぱり案の定、返事はなかった。

窓の方から微かに音が聴こえてきた。
小さい声で「よっこいしょ・・」なんて言いながら立つ。
『まだ若いんだから、よっこいしょはないだろ？』って、笑う樹を
思い出す。
大好きな樹の声が、耳にまだ残ってる。
窓の方へ歩み寄る。
少し開いたカーテンの隙間から外の様子が覗えた。

さっきまで晴れていたのに。

私の心を映しているかのように。

天気は雨に変わってた。

終

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3245t/

通り雨。

2011年6月19日23時42分発行